

IRIS

Pietro Mascagni



Sunday, May 27, 2018 14:00 Nihonbashi Theater Tokyo



歌劇
「イリス」
ピエトロ・マスカーニ作曲



2018年 5月27日（日）14:00 日本橋劇場



ご挨拶

本日はお忙しい中お越しいただき、誠にありがとうございます。

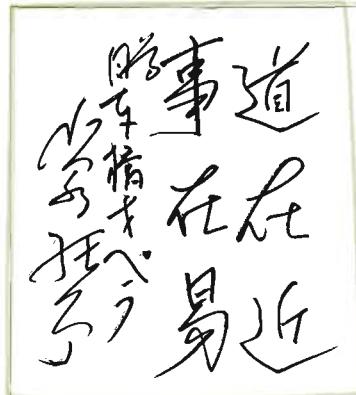
日本橋オペラは、2013年から日本橋オペラ研究会（中央区社会教育団体）として活動しています。2015年からは、こちら日本橋劇場に本拠地を移して、2015年楽劇「トリスタンとイゾルデ」、2016年歌劇「トスカ」、そして本日の歌劇「イリス」が、3回目のオペラ公演となります。今回は中央区文化推進事業助成を受けて、これまで以上に身の引き締まる思いで望んでいます。

オペラは17世紀初頭イタリア・フィレンツェで生まれ、舞台芸術の頂点と言われます。一方偶然ですが、丁度同じ頃、日本のオペラとも言える歌舞伎が発祥し、江戸時代初期には現在の中央区で発展、その後浅草を経て、現在の歌舞伎座に至る日本の伝統芸能が確立されました。オペラの都ウィーンでは、3回続いたことは「伝統」と認めるそうです。私たち日本橋オペラでは、今日から中央区・日本橋の「伝統」として、先人の芸術に対する熱い心の上に、中央区から世界に向けた新しい芸術を発信して、中央区、日本橋の文化の向上に寄与していきたいと願っています。

新年号を迎える2019年5月26日（日）には、こちらの日本橋劇場で第4回目のオペラ公演を予定しています。なおこの度、日本橋オペラ後援会が発足しました。幅広い皆様のご賛同を得られれば幸いです。

日本橋オペラ代表 福田祥子

小泉純一郎元総理から日本橋オペラに応援メッセージを頂きました！



道は近きに在り、事は易きに在り
(求めているものは近くにあり、
解決する方法は易しい)



指揮 佐々木 修 (Osamu Sasaki)

青森県弘前市出身。武蔵野音大卒業。オーストリア政府奨学生。ザルツブルク・モーツアルデウム音大指揮科最優秀卒業。カラヤン、チェリビダッケなどの巨匠に師事。同大音大オーケストラ常任指揮者をつとめる。1979年カラヤン国際指揮者コンクール入賞。1982年東洋人として初めて、ザルツブルク国際モーツアルト週間で指揮「心から自然でしなやか、新鮮なモーツアルト指揮者」(オペラ・コンツェルト誌)と評価を受け、国際モーツアルデウム財団よりパウムガルトナー賞を授与される。1984年ベルリン・ドイツ交響楽団を指揮して、リアス放送新人演奏会に出演。帰国後、日本各地のオーケストラ、合唱を指揮。またNHKや民放のパーソナリティー、音楽番組制作、女性向けモバイルコンテンツ「ルナルナ」の創設、AI特許など、マルチなタレントで活躍。近年はワーグナー指揮者として「ニーベルングの指環」全曲、「トリスタンとイゾルデ」と連続して指揮をして注目されている。日本橋オペラ常任指揮者。(株)マエストロ代表取締役。



演出 舘 亜里沙 (Arisa Tachi)

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。同大学大学院にて博士号取得(専攻:音楽学)。2009年安宅賞受賞。2008年よりオペラを中心に演出を手掛け、主要演出作品に「ポッペアの戴冠」「ペール・ギュント」「輪舞曲—金子みすゞの詩による音楽劇」「ヘンゼルとグレーテル」「トリスタンとイゾルデ」「蝶々夫人」「秘密の結婚」「コジ・ファン・トゥッテ」「ジャンニ・スキッキ」「ラ・ボエーム」など。2010年-2014年P.コンヴィチュニー氏のオペラ・アカデミーに参加し、研鑽を積む他、直井研二、岩田達宗、M. G. フリードランダー、佐藤美晴各氏などの演出助手を務める。近年は演出付コンサートの企画・構成や表現技術を必要とする学生の指導、劇作品の脚本執筆なども手掛け、活動の場を広げる。2015年演出家を対象とした「創作コンペティション Vol.5」最終上演審査にて、三島由紀夫「葵上」を発表。<https://arisa-tachi-411.jimdo.com/>



ピアノ 小滝翔平 (Shohei Kodaki)

都立芸術高等学校を経て桐朋学園大学音楽学部演奏学科ピアノ専攻卒業。2002年JML主催日独青少年交流コンサート in Japanに出演、翌年ドイツ各地でのコンサートに出演。2008年ソレイユ音楽コンクールにて第3位並びに審査員奨励賞を受賞。現在ソロ活動の他、ピアノ講師、オペラの稽古伴奏、演奏会やコンクールなどの伴奏等、様々な音楽活動を行っている。2018年昭和音楽大学大学院修士課程音楽芸術表現専攻ピアノ分野修了。



イリス役 福田祥子 (Shoko Fukuda) ドラマティック・ソプラノ

大阪音大ピアノ科卒業。大阪芸大大学院声楽専攻修了。第6回大阪国際音楽コンクール第2位。東京二期会オペラ研修所本科首席修了、優秀賞受賞。ワルキューレ、ジークフリート、神々の黄昏、トリスタンとイゾルデ、蝶々夫人、椿姫、ドン・カルロ、トゥーランドット、トスカ、イリス、ユージン・オネーゲン等に主役として出演。『圧倒的に鮮烈な歌声と存在感。生まれながらのブリュンヒルデ』と絶賛される。またCD「イタリア・オペラアリア集」は、『日本にも真に世界にも通用する本格的なオペラ歌手誕生か』(音楽現代等)と推薦を受ける。ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場で研修を受け、2015年からはスタラ・ザゴラ国立歌劇場(ブルガリア)、コシチエ国立歌劇場(スロバキア)などで、蝶々夫人、トスカの主役として度々出演、絶賛されている。東京二期会、関西二期会各会員。日本橋オペラ代表。



チエーコ役 矢田部一弘 (Kazuhiro Yatabe) バス

国立音楽大学声楽学科卒業、同大学院オペラ科修了。P. マスカーニ、G. ラウリ・ヴォルピ他の国際コンクールに入賞。日本、ヨーロッパ各地でオペラ、コンサートに出演。近年は「ドン・カルロ」フィリッポ II 世役、「ナブッコ」ザッカリーア役、「マクベス」バンロー役、「リゴレット」スペラフチーレ役等、ヴェルディ作品、ロッシーニ作曲「セヴィリアの理髪師」、モーツアルト作曲「魔笛」、トマ作曲「ハムレット」、プッチーニ作曲「トゥーランドット」他に出演。2018年はプッチーニ作曲「ラ・ボエーム」に出演予定。五島記念文化財団オペラ新人賞受賞。国立音楽大学非常勤講師。CD「Preghiera-- 祈り --」好評発売中。



オオサカ役 上本訓久 (Norihisa Uemoto) テノール

洗足学園音楽大学、同大学大学院と共に首席で卒業。読売新人演奏会に出演。卒業後、ナポリに渡り国立サレルノ音楽院に入学し、E. カペーチェ氏に師事。ナポリのカンピ・フレグレイ国際声楽コンクールで第一位。ナポリ、サレルノ等でコンサートに出演。帰国後、オペラでは 30 以上のプリモテノール役で出演。他にヴェルディ、モーツアルトのレクイエム、ベートーベンの第九等に出演。CD「誰も寝てはならぬ」「グランデ アモーレ」「グリダーレ」が発売中。FM 市川うららで第2、4の土曜日、隔週グリダーレのパーソナリティーで放送中。藤原歌劇団団員。



キョウト役 飯田裕之 (Hiroyuki Iida) バリトン

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。ドイツ、ウィーンのセミナーにてディプロマを取得。また数多くの音楽祭に出演。大学卒業後は、根っからの芝居好き・舞台好きの性格によって、二枚目役からコミカルな役まで幅広く演じる中でも、軽快で機転の利いたモーツアルト作曲「フィガロの結婚」フィガロ、どことなく憎めない誘惑の悪魔であるグノー作曲「ファウスト」メフィストフェレスは、特筆すべきものとして観客を魅了してやまない。現在は、オペラ出演と並行し、軽妙なトーク、涙あり笑いありのプログラミングという 彼の世界観を存分に楽しめる「飯田裕之バリトン・リサイタル」を活動の中心に据えている。主な作品「あんこまパン」(作詞 林 望 / 作曲 伊藤康英)「ビビ物語」(作詞 たがわいちらう / 作曲 増井めぐみ)「赤いライオン」(作詞・作曲 / 小川史哲)モノオペラシリーズ「カルメン」「ジャンニ・スキッキ」など



ゲイシャ役／ディーア役 田中由佳 (Yuka Tanaka) ソプラノ

埼玉県出身。日本大学芸術学部音楽学科声楽コース卒業。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部修了。イタリアにてバルバラ・フリットリ氏マスタークラス受講、ディプロマ取得。今までに歌劇「フィガロの結婚」伯爵夫人、「魔笛」侍女 1、パパゲーナ、「こうもり」ロザリンド、「カルメン」メルセデス、「イル・トロヴァトーレ」イネス等に出演。日韓国交正常化 50 周年記念企画の創作オペラ「ザ・ラストクイーン」へ、ソプラノソロとして出演。藤原歌劇団団員企画コンサートに出演する他、東京、埼玉、神奈川を中心にコンサート、オペラに多数出演。阪口直子氏に師事。音楽団体「イマデキプロジェクト」主宰。藤原歌劇団準団員。日本オペラ協会準会員。



小間物屋役 木野千晶 (Chiaki Kino) テノール

京都大学大学院工学研究科博士課程修了。関西二期会オペラ研修所第42期修了。東京二期会オペラ研修所第54期マスターコース修了。調布市民オペラ「トゥーランドット」パン役、オペレッタ協会「伯爵令嬢マリツア」ジュパン役などに出演。松岡重親、北村晶子、故・小林正夫の各氏に師事。

東京二期会会員。工学博士。



くず拾い役(ソロ) 根岸一郎 (Ichiro Negishi) テノール

武蔵野音楽大学声楽科、早稲田大学仏文専修卒業。パリ第IV大学修士。日仏声楽コンクール、フランス音楽コンクール、アンリ・ソーグ国際コンクールに入賞。古楽から現代作品まで幅広く活動し、特にフランス近代歌曲での評価が高く日仏声楽コンクール審査員を務める。東京室内歌劇場、日本フォーレ協会、コンセール・C会員



コーラリスト 高橋拓真 (Takuma Takahashi) テノール

武蔵野音楽大学音楽学部音楽教育学科卒業。同大学院修士課程修了。卒業後、「戯言の饗宴」ラーポとしてオペラデビューを果たす。それをきっかけに、「ドン・ジョヴァンニ」「秘密の結婚」「ランメルモールのルチア」「ラ・ボエーム」「トスカ」「こうもり」など、数多くの作品に出演。2017年9月、自ら企画し立ち上げた、ぽんて☆きあーれ公演 オペラ「秘密の結婚」でパオリーノを演じた。他ジャンルも含め自らの能力を磨き、スキル向上を図り、活動の場を広げている。



コーラリスト 吉永研二 (Kenji Yoshinaga) バリトン

熊本県天草市出身。大分県立芸術文化短期大学、同大学専攻科を首席で修了。東京藝術大学声楽科バス専攻を卒業し、武蔵野音楽大学大学院音楽研究科博士前期課程修了。クラシックから歌謡曲まで幅広いレパートリーを持つ。現在、武蔵野音楽大学研修員。カルチャーセンター新所沢店、志木店講師。



コーラリスト 木村雄太 (Yuta Kimura) バリトン

大分県立杵築高等学校卒業。東京藝術大学卒業。これまでにバッハのいくつかのカンタータや、フォーレ「レクイエム」でソリストを務める。オペラでは「ドン・パスクアーレ」「椿姫」等の作品で主要な役を演じる。また、和田一樹指揮の下、「ラ・ボエーム」マルチェッロ役でリバティベルオーケストラと共演。





コーラリスト 沼田真由子 (Mayuko Numata) ソプラノ

武蔵野音楽大学、同大学大学院声楽専攻修了。大学院在学中にNTTドコモより奨学金を授与される。オペラ「ヘンゼルとグレーテル」(グレーテル・露の精)、「ホフマン物語」(オランピア)他、二期会サロンコンサート等多数の公演に出演。二期会BLOC“Liebeslieder”メンバー。二期会会員



コーラリスト 高橋千夏 (Chinatsu Takahashi) ソプラノ

昭和音楽大学卒業。故・五十嵐郁子、照屋江美子の各氏に師事。第1回日本歌曲コンクール奨励賞受賞。W.マッテウツィ、M.デヴィア、D.マツオーラ各氏によるマスタークラス受講。第82回読売新人演奏会に出演。Teatro Progetto Nuovi公演「修道女アンジェリカ」タイトルロールで出演。スガナミ音楽教室声楽講師。



コーラリスト 菊池未来 (Miku Kikuchi) メゾソプラノ

岩手県出身。昭和音楽大学卒業。公益財団法人日本オペラ振興会オペラ歌手育成部修了。合唱で「フィガロの結婚」「愛の妙薬」「ラ・ボエーム」「ファルスタッフ」に出演。これまでに村松玲子、細川久美子、鈴木とも恵、八尋久仁代各氏に師事。藤原歌劇団準団員、日本オペラ協会準会員。



コーラリスト 山口なな (Nana Yamaguchi) ソプラノ

昭和音楽大学声楽学科を首席で卒業。片野坂栄子、的場辰朗の各氏に師事。第18回KOBE国際音楽コンクールB部門優秀賞並びに兵庫県教育委員会賞受賞。桜美林大学ブルヌスホール主催音楽劇「銀河鉄道の夜2014」に出演。第87回読売新人演奏会に出演。現在日本オペラ振興会オペラ歌手育成部マスターコース在籍。



コーラリスト 高橋みのり (Minori Takahashi) ソプラノ

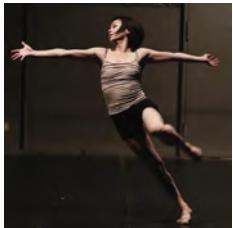
中央大学経済学部卒業。社会人を経て東邦音楽大学大学院、同大学ウィーンアカデミー修了。東京国際芸術協会および国際芸術連盟新人才オーディション合格。第4回東京国際声楽コンクール愛好家部門第2位(1位なし)。ハイドン「天地創造」のソリストをつとめる。声楽を白石敬子、武藤直美、片岡啓子各氏に師事。



コーラリスト 中島麻紀子 (Makiko Nakashima) メゾソプラノ

東京音楽大学音楽教育専攻卒業。卒業後ブランクを経て音楽活動を再開、第2回春の声声楽コンクールプロ部門他入賞。これまでに新宿区民オペラ「魔笛」「エフゲニー・オネーギン」オペレッタ「こうもり」に出演し、バロック音楽のコンサートや教会にて宗教音楽のソリストを務める。及川音楽事務所所属、東京室内歌劇場会員。

振付／ダンサー 遠藤綾野 (Ayano Endo)



8歳よりクラシックバレエを始め、師事する佐多達枝作品に01'～11'まで出演。コンテンポラリーダンスでは柳本雅寛、神村恵、磯島未来等に師事、作品にも携わる。08'より自らも振付活動を開始し、小作品含む約25作品を発表。オペラでは「魔笛」「トゥーランドット」等に振付提供（荒川バイロイト、首都オペラ等）。現在は静岡を拠点とし、CCC（静岡市文化クリエイティブ産業振興センター）や「街は劇場プロジェクト」等の企画でパフォーマー、コーディネーターとして活動中。

ダンサー 矢嶋美紗穂 (Misaho Yajima)



3歳より母の元バレエを始める。国立モスクワバレエアカデミーへ留学後、バレエ団活動を経てジャズ、ヒップホップ、コンテンポラリー等沢山の作品や人と出会い、枠に捉われず自由なスタイルで創作活動、作品に関わり続け、近年は演劇作品の舞台に多く振付、出演している。2人芝居ユニット「ヤジ×サト」、中原百合香主催「PINKBLUE」、大岩淑子主催「vision project」でも活動中。商業演劇、ジャニーズバックダンサー、CMやMV、写真家のモデルなどにも出演



中央区にオペラ公演の可能な「オーケストラピット」のある公共ホールの建設を希望します！

みんなの署名をお願いします！

《理由》

中央区には、オペラやミュージカル公演に必要なオーケストラピット（舞台手前でオーケストラが演奏できる一段下がった空間）のあるホールがありません。一方近隣の台東区、千代田区、港区などは、オーケストラピットのあるホールが数多くあります。中央区立のホール建て替えや新設の際は、オーケストラピットの設置を希望します。

《署名方法》

お名前は自筆でお願いします。個人の方は住所（中央区以外の方でも結構です）、中央区の企業や団体の方は、所属先の企業名等だけで結構です。ロビーに記入用紙があります。

《提出先》 中央区長 《発起人》 日本橋オペラ

《管理》 個人情報については厳重に管理して、他の目的に利用することはありません。

作曲 ピエトロ・マスカーニ (Pietro Mascagni)



1863年リヴォルノ(イタリア)に生まれる。故郷の音楽院で学んだ後、ミラノ音楽院で「ジョコンダ」の作曲者として有名なポンキエッリに師事。1890年ローマの楽譜出版社ソンゾーニョの一幕歌劇コンクールに応募。「カヴァレリア・ルスティカーナ」が1等賞に入選、驚異的な成功を収める。この作品によって、マスカーニの名は一夜にして世界中に知れ渡るようになった。1895年にはペーザロのロッシーニ音楽院院長に就任。指揮者としても活躍するが、スカラ座監督の座を狙ってムッソリーニに接近したことが災いして、戦後全財産を没収され、1945年失意のままローマのホテルで死去。

台本 ルイージ・イッリカ (Luigi Illica)



1857年ピアチェンツァ近郊(イタリア)のカステッラルクアートに生まれる。プッチーニ、ジョルダーノ、マスカーニなどのために書いた台本作家として名高い。プッチーニ作曲「マノン・レスコー」「ラ・ボエーム」「トスカ」「蝶々夫人」、ジョルダーノ作曲「アンドレア・シェニエ」、カタラーニ作曲「ラ・ワリー」、マスカーニ作曲「イリス」などの各台本を提供。イッリカはオペラ台本に詳細なト書きを入れる、またそれまでのイタリアオペラで行われていた、シラブルによる均等音節を、不均等音節(字余り、字足らず)を用いるなど、革新的な試みをした。1919年コロンバロンで死去。

歌劇「イリス」あらすじ

初演:1898年11月22日 ローマ・コンスタンツィ劇場

第1幕 イリスの家の庭

夜明け。太陽を賛美する合唱「私こそが生命、永遠の美、愛」。純粋な娘イリスは、盲目の父と田舎にひっそりと暮らしている。イリスは悪夢を見ていたが、夜が明け太陽に救われたと感謝する。好色な金持ちの若者大阪と、吉原の芸者屋の主人京都が、物陰からイリスの様子を窺い、イリスを連れ去る計画をたくらんでいる。娘達が川に洗濯に来て、イリスは庭の花を讃える。遠くに楽隊の音が聞こえ、大阪と京都が旅芸人に変装して現れる。彼らはイリスの庭のそばに舞台を作り、人形芝居をするといつて娘達を呼び込む。興味をもったイリスは父親が止めるのも聞かず、芝居を見にいく。人形芝居は、不幸な主人公ディーアが祈ると、大阪演じる太陽の子イヨールによって救われるという物語。太陽を崇拜しているイリスは、この芝居に夢中になる。その時、京都の手下の芸者達がイリスを取り囮み、他の娘達に気付かれないうちに彼女をさらってしまう。京都はイリスの父親に、金とニセの手紙を残し去る。父親は小屋に戻ろうとしてイリスを呼ぶが、返事がないのであわてる。やがて通りがかった小間物屋が残された手紙を読むと、イリスは吉原に行ったと書かれている。イリスに捨てられたと怒った父は嘆き、吉原へいつて娘を罰しようと思う。





第2幕:吉原のキョウト(京都)の芸者屋

京都は大阪に眠っているイリスを見せ、高く売りつけようとする。イリスは眠りから覚め、自分は楽園にいると思いこむ。そこへ大阪がやってきて口説こうとするが、イリスは笑うばかり。やがて彼女は、その声が昨日芝居で見たイヨールの声だと気付き、大阪に向かって「太陽の子」と呼びかける。

すると今度は大阪が笑いだし、自分の名前は「快楽」だと答える。その言葉を聞いたイリスは、昔坊さんから見せられた、怪物タコが娘を締め上げている絵を思い出した。坊さんは「快楽」は「死」を意味するとイリスに教えたのだ。イリスはとうとう泣き崩れる。すっかり失望した大阪は、彼女を家に返してやれと京都に言う。しかし京都は彼女を遊郭に入れることにする。京都はイリスに壁に開いた暗い穴倉を見せ、言うことを聞かなければそこへ放り込むと脅す。豪華なおいらん衣装に着替えたイリスは張り店に出され、欲望に満ちた男達的好奇心に燃える目の前にさらされる。イリスの美貌に男達は驚き、ついには吉原の「偉大な光」とまで賛美される。大阪は美しくなったイリスを見て、自分の過ちを後悔し彼女の名を呼んで迫る。そこにイリスの盲目の父親が聞きつけ「とうとう見つけた」と叫ぶ。父親の声を聞き分けたイリスは喜ぶが、父親は彼女の顔に泥を投げつける。あまりのショックに、イリスは自ら壁の穴倉へと身を投げる。



第3幕：幻想的なエピローグ

町はずれのゴミ捨て場。夜、浮浪者たちがゴミをあさっている。一人が死体を見つける。彼らは死体から着物や装飾品を取ろうとするが、死体だと思っていたのに急に動き出すので、驚いて逃げ出す。それは瀕死の重傷を負ったイリスだった。大阪、京都、父親のチーコがそれぞれのエゴイズムで、イリスを失った気持ちを歌う。しかしやがて夜が明け、大気は光に包まれる。イリスは太陽だけは自分を見捨てなかつたと感謝し、苦痛から解放されて息を引き取る。あたりに花が咲き乱れ、太陽賛歌の合唱で幕となる。



出典：モバイル音楽事典（挿絵はイリスの初版本より転載）

まやかしのユートピア——《イリス》演出ノート

館 亜里沙

マスカーニのオペラと言えば、《カヴァレリア・ルスティカーナ》で生々しく描かれた、閉鎖的で見栄に囚われる村人達が印象的となっています。合唱の明るくもヒステリックな盛り上がりは、村人達の集団心理を如実に表していますし、主人公達に与えられた激しい音楽は、そんな集団の中で自由や己の立場を守ろうとあがく人間の心情を表している、と解釈しうるものです。《イリス》の音楽も、第1幕終わりの狂気的なチエーコの音楽や第2幕の大きく盛り上がる合唱や大阪の音楽からは、確かに《カヴァレリア》と同じ人間の生々しさを感じることが出来ます。しかしその一方で、《イリス》の各々の場面や幕開きに当てられた音楽は、象徴的なテキストの多い台本に引き寄せられ、もっと神秘的で息の長いものになっています。何よりの差は、合唱に与えられた宗教的な楽曲の意味の違いでしょう。《カヴァレリア》の中でもとりわけ有名なミサの大合唱が表しているのは、古くからの習慣を頑なに守る村人達の厚き信仰ですが（同時にそれは「教会に入れない」主人公サントウツアを締め出すものもあります）、《イリス》の冒頭と終盤の太陽合唱が表しているのは、天から（と思しき）声です。

この太陽合唱は、太陽に憧れるイリスの心に宿ったユートピアだと考えられますが、そのユートピアは、決して他の登場人物達と無縁ではありません。むしろ、今回の舞台に生きている人々は皆、現実世界の汚さに疲れ、漠然と美しいものへの、見失ったユートピアへの憧れを持っています。この作品中一番の策士とも言える京都は、そのことを感覚的に理解しているのでしょうか。彼は紗幕（光を入れることで奥の景色を幻影的に見せることの出来る透けた幕）を巧みに扱うことで、まやかしのユートピアを創り上げ、イリスを誘拐することに、また彼女を魅力的な女性として披露することに成功します。この演出ではそうした紗幕の使い方に加えて、人々がまやかしのユートピアに惹かれざるを得ないような、残酷な現実世界を描くべく、台本のト書きでは必ずしもそう書かれていない芝居を加えています。合唱の演じる民衆は、一方では良心を示すものの、また一方ではチエーコの落とした銭に群がり、簡単に京都に雇われて人を騙し、死体を無下に扱います。彼らは決して「悪い人」ではありません。生活のためにそうならざるを得なくなつたのです。策士の京都も、富ゆえに享樂に浸る大阪も、イリスへの憧れに理性を失ったチエーコも、果てはそのような民衆によって死に至り、第3幕後半では亡靈としてさまよいます。

なお先ほど言及した紗幕ですが、実は京都の演出するまやかしのユートピアとしてだけではなく、イリスの心象、すなわち彼女のユートピアを映し出すことにも用いています。イリスの心に映し出された憧れの世界と、京都が生き延びるために創り上げた美の世界との間に、境界線は無いのかもしれません。ユートピアは、ユートピアである時点で、虚構でしか無いのですから……。本日いらっしゃる皆様には、ぜひ《イリス》の世界を、単なる1人の少女の悲劇としてだけではなく、ユートピアを見ようともがいた人々全員に振りかぶった悲劇として、御覧いただければ幸いです。

日本橋オペラの沿革

- 2013年5月 日本橋在住のオペラ歌手福田祥子と指揮者佐々木 修が中心となり、日本橋オペラ研究会が中央区社会教育団体として発足。
- 2013年 ワーグナー・アカデミー「トリスタンとイゾルデ」(演奏会形式)
7月と10月に分けて開催。(日暮里サニーホール)
- 2014年5月 ワーグナー・アカデミー「ジークフリート、さまよえるオランダ人」(演奏会形式)
(日暮里サニーホール)
- 2015年5月 日本橋オペラ第1回公演 ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」(日本橋劇場)
- 2016年4月 日本橋オペラ第2回公演 プッチーニ「トスカ」(日本橋劇場)
- 2017年8月 日本橋オペラ特別公演～デュオリサイタル
(ヒッレブラント、ヴァレントヴィッチ両氏招聘)(日本橋劇場)
- 2018年4月 日本橋オペラ後援会発足
- 2018年5月 日本橋オペラ第3回公演(中央区文化推進事業 助成対象事業)
マスカーニ「イリス」(日本橋劇場)

浮世絵と錦絵に見る、江戸から明治の景色

表紙上／葛飾北斎「あやめ きりぎりす」1833

正に、歌劇「イリス」を象徴する北斎の浮世絵。図鑑の挿絵とも言える、入念に描かれた「あやめ」と、その花舟に隠れる逆さになつた「きりぎりす」が描かれている。江戸時代末期、日本の陶磁器が数多く海外に流失したが、その包み紙が、なんと浮世絵であった。ゴッホやモネは、北斎や広重に大きな影響を受け、西洋ではジャポニズムが流行した。

表紙下・歌川国貞「新吉原京町一丁目」

人形町の旧吉原が1656年に浅草寺裏の日本堤に移転して以降、新吉原と呼ばれる。京町一丁目は、6つのブロックに別れた新吉原の一区画。角海老・角ゑひやうちといった店の花魁と呼ばれる人気遊女たちと、若い花魁候補が描かれている。花魁は一流の教養と文化を身に着けた、江戸っ子の憧れでもあった。

裏表紙上／歌川国貞「江戸名所百人美女」「人形町」1858

裏表紙中／歌川国貞「江戸の花名勝会」「人形町の出しや」「髪結才三郎 市村羽左衛門」1863

人形町の町名は、江戸時代多くの人形師が住んでいたことに由来する。人形町には中村座と市村座という歌舞伎小屋があった。また人形町では「もぐさ」が名物だった。ちなみに創業1659年の釜屋もぐさは、現在も当劇場から徒歩3～4分のご近所で営業している。

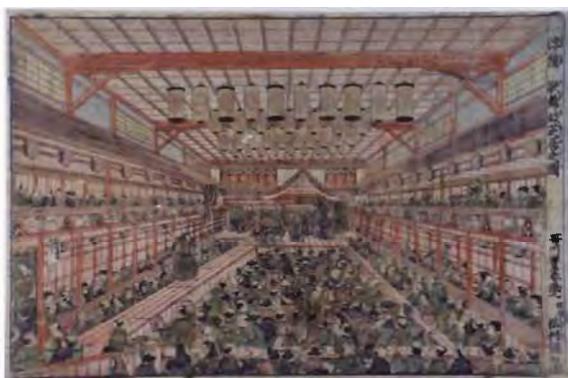
裏表紙下／楳葉周平「小網町鎧橋通り吾妻亭」1888

蛎殻町の交差点から、兜町方面を見た錦絵。奥には日本最初の銀行である、第一国立銀行(1873年開業)が見える。明治に入り、現在の東京証券取引所の前の鎧橋が、トラス橋に建て替えられ、橋のたもとには吾妻亭というレストランが営業して、文化人が集っていた。

オペラと歌舞伎

佐々木 修

今日上演される最古のオペラは、1607年に初演された、イタリアの作曲家モンテヴェルディ(1567-1643)の「オルフェオ」です。偶然にもちょうど同じ頃、日本のオペラとも言える歌舞伎が発祥します。1603年京都女院御所に於いて「お国」という女性が演じた「かぶき踊」が、最古の上演記録と言われます。そして同年、徳川家康が江戸幕府を樹立、全国の浪人が江戸に仕事を求めて流入しました。その結果、江戸の男女の比率が2:1で男性が多くなったこと、また前述の「かぶき踊り」がエロチックな要素を含んでいたことから、江戸で歌舞伎が流行する条件が整いました。江戸の最初の歌舞伎小屋は、1624年現在の京橋にあるブリヂストン美術館の場所に、猿若座が櫓(ヤグラ)をあげたのにはじまります。その後、1632年に現在の日本橋堀留町へ、1651年には日本橋人形町に移転、さらに、山村座、森田座などが銀座に櫓をあげ、江戸初期の歌舞伎が発展しました。またそれに先立つ1612年には、江戸初の遊郭が、現在の人形町に設置され、海岸に近くヨシが茂り、町外れだったことから「吉原」と呼ばれるようになりました。1657年明暦の大火をきっかけに、新吉原(浅草)に移転するまでの半世紀は、今の我々の目の前の人形町界隈で、歌舞伎や遊郭、つまり江戸文化の最も生き生きとした文化が花開いていたことになります。



江戸時代の歌舞伎小屋

マスカーニ「イリス」VS プッチーニ「蝶々夫人」

江戸の文化とヨーロッパの文化の出会いは、19世紀後半パリやロンドンで開催された万国博覧会です。日本の浮世絵や陶磁器などの工芸品が、ヨーロッパに与えた影響は「ジャポニズム」と言われ、特に美術界に顕著です。音楽ではプッチーニ(1858-1924)の「蝶々夫人」が、長崎を舞台したオペラとして有名です。そして本日上演するマスカーニ(1863-1945)の「イリス」もまた、このジャポニズムから生まれたイタリアオペラです。興味深いことにこの二人は、ミラノ音楽院在学中に意気投合して、一時期同じ下宿で生活をしました。マスカーニは1890年に初演された「カヴァレリア・ルスティカーナ」の大成功により、オペラ界のスターになりました。その成功から、ミラノの大出版社リコルディが、プッチーニの台本も担当していた、売れっ子作家のイッリカと組み合わせて作曲を依頼したのが「イリス」です。内容は当時のジャポニズムの異国情緒を取り入れ、江戸、吉原を舞台とし、配役の名前が、キョウト、オオサカ、さらにはフジヤマ、ゲイシャ、団十郎など、正に当時のヨーロッパの人が知っている限りの日本語を散りばめた作品となっています。このチープさこそが、「イリス」が

「蝶々夫人」ほど人気の出なかった最大の原因かもしれません。「蝶々夫人」が日本のメロディーを巧みに取り入れたのに比べ、「イリス」ははつきりと認識できるような日本のメロディーはありません。その音楽の特徴は、むしろワーグナーの影響が、特に各前奏曲に色濃く感じられます。イッリカは日本という素材を使い、イタリアオペラという枠組みで、時代と国を超えた東洋哲学を語る壮大な実験をしたとも思えます。



ゴッホ作「花魁」



川上貞奴(1908年ベルリンにて)



クロード・モネ作『ラ・ジャポネーズ』

再び日本橋人形町物語

極論になりますが、「イリス」と「蝶々夫人」との違いは、マスカーニとプッチーニという二人の作曲家が、日本人女性と接したか否かの違いかと思います。1871年日本橋に一人の女子が生まれました。その娘が7歳の時、人形町の芸妓置屋「濱田屋」の養女となり、芸者としての修行をはじめます。この娘こそ、後に日本人最初の女優として、ヨーロッパやアメリカで絶賛された川上貞奴なのです。1900年のパリ万博では、川上貞奴の舞台が大きな反響を呼び、キモノ風の「ヤッコドレス」が流行。ドビュッシーやピカソは彼女の演技を絶賛しました。プッチーニは1902年ミラノで貞奴の舞台に接しているほか、当時ミラノ公使夫人であった大山久子から日本人について学び、日本の楽譜を研究して「蝶々夫人」を作曲しました。一方の「イリス」の初演は「蝶々夫人」に5年ほど先立つ1898年ですが、マスカーニにとっての日本は、浮世絵などで想像する黄金の国、そして黄泉の国「ジパング」だったのです。マスカーニがもしも日本人と接していたら、「イリス」はきっと違う作品になっていたでしょう。ちなみに人形町の芸妓置屋「濱田屋」は、現在ミシュラン掲載の料亭「玄冶店(げんやだな)濱田屋」で、その社長の三田芳裕氏は株式会社明治座の社長でもあります。さらに同氏は中央区文化・国際交流振興協会の会長として、今回日本橋オペラが助成を受けることになった、中央区文化推進事業助成を決定していただいたという縁があります。また本日の会場の日本橋劇場(日本橋公会堂)は、明治時代から旧日本橋区役所があった場所で、前述の貞奴はこの地で、1894年に「オッペケペー節」で有名な川上音二郎と結婚届を出したのです。と、この部分だけは、私の想像です！

日本橋オペラは皆様にお約束します！

- 1) 高い水準のオペラ公演を、中央区から世界に発信します。
- 2) 若手芸術家の育成に努めます。
- 3) IMSLP（国際楽譜プロジェクト）への楽譜の提供を通じて、世界の音楽界に貢献します。
- 4) 地域の病院、学校、老人施設等でのボランティアコンサート、オペラの立稽古の公開を通じて、地域の皆様と歩みます。
- 5) オペラ公演の可能な、中央区の公共ホール建設運動を推進します。
- 6) 中央区を中心とする企業との連携を高めて、日本を代表するCSR（企業の社会的貢献）活動のモデルを構築します。
- 7) 会費は全て、オペラ公演の経費とさせていただきます。
- 8) 日本橋オペラの全ての活動を通じて、中央区、日本橋のブランド向上に努めます。

日本橋オペラ後援会入会のお誘い



武藤 正司

日本橋オペラ後援会代表幹事
株式会社Lee.ネットソリューションズ
代表取締役社長

日本橋オペラは「日本橋」という冠に誇りを持って2013年に設立されました。今年度の「イリス」でオペラとしては3回目の公演ですが、中央区文化推進事業に選ばれました。これまでのエネルギーッシュな活動は、中央区から全国へ、さらに世界に羽ばたいていく予感がします。日本橋オペラへの支援は企業にとって、文化振興はもとより、地域貢献など幅広いCSR活動（企業の社会貢献活動）としても意義ある活動と思います。日本橋オペラの後援につきましてご理解ご協力を賜りますようお願いいたします。

日本橋オペラ後援会

- ・日本橋オペラの事業目的に賛同していただける個人・法人。
- ・会費：年額 [個人] 1口2万円 [法人] 1口5万円、1口以上
- ・特典：日本橋オペラ公演のご招待券、プログラムの進呈（2名様）
日本橋オペラ公演プログラムへのご芳名を顕彰させて頂きます。
法人会員には、会員企業ホームページへのCSR活動の掲載、
日本橋オペラ公演のチラシ、ポスターへの会社名の刷り込み等のご相談を承ります。

（後援企業：2018年5月18日現在）



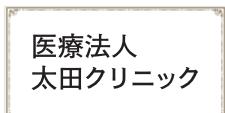
株式会社日本取引所グループ



株式会社Lee.ネットソリューションズ



Ideas & Chemistry



Marubeni
丸紅株式会社



日本橋オペラ2018
歌劇「イリス」全曲
ピエトロ・マスカーニ作曲
ルイージ・イッリカ台本
《イタリア語上演・日本語字幕付・ピアノ伴奏》
中央区文化推進事業助成 対象事業
日本橋劇場(日本橋公会堂4F)
2018年5月27日(日)14:00

第1幕:50分 第2幕:50分 第3幕:30分
(休憩:各幕間20分)

指揮／佐々木 修 演出／字幕／館 亜里沙 ピアノ／小滝翔平

イリス/Iris／福田祥子／純真無垢な少女
チェーコ/Il Cieco／矢田部一弘／盲人／イリスの父
大阪/Osaka／上本訓久／金持ちで好色な若旦那
京都/Kyoto／飯田裕之／吉原の芸者屋の主人
芸者/Una Guècha／ディーア/Dhia／田中由佳／人形芝居の不幸な主人公
小間物屋/Un Merciaiulo／木野千晶
くず拾い(ソロ)/Un Cenciaiulo／根岸一郎
くず拾い／高橋拓真 吉永研二 木村雄太

娘/Le Mousmè
沼田真由子 高橋千夏 菊池未来 山口なな 高橋みのり 中島麻紀子
合唱/Coro
明石将岳 大倉修平 佐藤靖彦 地主光太郎 落合一成
踊り子/Le Ballerine
遠藤綾野(振付) 矢嶋美紗穂
スタッフ
舞台監督/小林万莉奈 照明/田村 梓 演出助手/森谷健太郎
稽古ピアノ/松岡なぎさ 鈴木架哉子 字幕機材提供/まくうち

全席自由一般 4,800円 中央区民割引 2,400円 子供(6歳以上)～学生 1,000円
《チケット・お問合せ》 株式会社マエストロ 《チケット》 e+(イープラス)

立ち稽古公開日(於:中央区立築地社会教育会館)
2018年4月17日, 23日, 25日, 5月1日, 7日, 8日, 11日, 14日, 15日, 22日, 23日

会場協力:株式会社Lee. ネットソリューションズ

主催:日本橋オペラ研究会